

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350841

研究課題名(和文) 青少年の「熟慮型」意思決定能力が危険行動防止、積極的健康に果たす機能

研究課題名(英文) Function of deliberate decision-making skills to prevent risk behaviors and improve mental health for adolescents

研究代表者

西岡 伸紀(Nishioka, Nobuki)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：90198432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：青少年の意思決定能力測定に関する内外の文献を収集し、中高生を対象とした調査内容を整理した。また、米国健康教育基準の意思決定スキルも踏まえ、意思決定能力の予備調査票を試作した。さらに、中学2年生を対象に予備調査を行い、調査票を改訂した。調査票には意思決定に関わる生活行動や危険行動を含め、中学生約1700人、高校生約600人を対象に本調査を行った。さらに、意思決定能力の学年差、性差、危険行動等との関連性を分析した。その結果、意思決定能力の因子として、意思決定のステップ、周囲への配慮や自立性、直感・自信などがあること、性差は小さいこと、因子により発達異なることなどが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We gathered references on deliberate decision-making skills of adolescents regarding risk behaviors, and referenced development of decision-making skills in the National Health Education Standards of USA to develop a preliminary questionnaire on the skills and risk behaviors. We revised the questionnaire through the preliminary survey, and conducted the main survey to 1700 junior high school students and 600 senior high school students. The results were as follows; 1)Factors of decision-making skills consisted of steps of decision-making, consideration to others/independence and intuition/confidence. 2)Differences of the factors between sex were small. 3)Developmental situation were different among the factors.

研究分野：複合領域

キーワード：意思決定 熟慮型 中高生 危険行動 生活行動 関連要因 自尊感情

1 . 研究開始当初の背景

現在の社会的状況には、価値観の多様化、情報化や高齢化の進行、経済格差や健康格差の拡大等がある。このような状況の改善は当然必要であるが、一方青少年には、困難な社会を生き抜き自己実現を果たすために、適切な意思決定が求められる。

意思決定が必要な健康・安全課題は多岐にわたる。例えば、薬物乱用、飲酒、喫煙、性の問題行動、交通事故や溺水等の不慮の事故、暴力、いじめ（加害）などの危険行動、食、睡眠、休養、運動などの生活行動、学校での教育活動等の積極的健康などある。なお、ここでの積極的健康は、危険行動ほどの明確な問題性や緊急性はなく、状態に幅がある生活行動や心理社会的健康状態等とする。

これらの課題では、意思決定の行いが結果を左右する。したがって、青少年の危険行動、積極的健康などに関わる意思決定能力の育成が必要である。意思決定能力の育成は従来重要視されており、例えば、学習指導要領、文部科学省の安全教育参考資料等においても強調されている。しかしながら、危険行動や積極的健康に関わる意思決定に特化したプログラムやカリキュラムは、開発されていない。

その主な理由は、日本の青少年の意思決定能力の実態が明らかにされていないことにあると考えられる。発達段階別の意思決定能力が明らかでない状態で、効果的なプログラムやカリキュラムの開発は期待できない。

2 . 研究の目的

本研究では、中・高校生を対象として、危険行動防止や健康的生活習慣の形成に関わると考えられる「熟慮型」を中心とした意思決定能力の実態を詳細に調べ、学年差や性差を明らかにする。また、同能力と、飲酒、喫煙、薬物乱用、不慮の事故等の危険行動との関連性、及び健康に関わる生活行動や心理社会的健康などの積極的健康との関連性を明らかに

する。

3 . 研究の方法

1) 調査票開発、予備調査

意思決定能力を質問紙調査により測定することを旨とし、まず、調査内容、調査項目の情報を得るため、Pub Med、医中誌、CiNii等から、「青少年」「子供」「危険行動」「意思決定」「能力」をキーワードとして文献を収集した。そのうち、調査内容や尺度を示す論文や著書 10 編について、「調査対象」「測定目的」「内容領域・下位尺度等」「危険行動等との関連性」について整理した。

それらを踏まえ、意思決定能力尺度の内容構成として、意思決定のステップ（選択肢の列挙等）、意思決定の仕方の自己評価（急いで決定する傾向等）、意思決定の仕方の認知（直感を信じる等）、意思決定の自主性、自立性（人に任せたい等）、意思決定に対する自信（結果への確信等）、意思決定の際の情報収集、相談（アドバイスを求める等）、意思決定に影響する要因への対処（振り返る等）として、35 項目を設定した。また、尺度の併存的妥当性検証のため、刺激欲求性、自己抑制、衝動性の尺度を含めた。予備調査票における危険行動に関する項目としては、調査協力校の意向を踏まえ、典型的な項目は避け、シートベルト着用、歩きスマホ、飲酒の誘いへの対処等とした。さらに、宿題の進め方、就寝時刻、ゲーム等の終了等の意思決定にかかわる生活行動を含めた。

予備調査票を公立中学校 2 校の 2 年生 218 人を対象に、2016 年 10 月に実施した。

意思決定尺度の因子分析、併存的妥当性、信頼性等を分析し、本調査票として、意思決定スキル調査項目を 24 項目に整理した。さらに、併存的妥当性の検証のため、自己制御(SR, 安達ら, 2002)、刺激欲求傾向(SS, 古澤, 1989)、喫煙・飲酒の将来予測等の危険行動、日常生活行動を加

えた。

2) 本調査

本調査票を用いて、2017年1~2月に、A県B市の中学校5校の1~3年生約1700人を対象に、また同3月に、C県の県立高等学校1校の1,2年生約600人を対象に無記名式質問紙調査を行った。倫理的配慮として、拒否が自由であること、調査終了後各自が封筒に密封し提出すること等説明した。

4. 結果

1) 中学生

回答者数は、1年558人、2年553人、3年562人/男865人、女790人/合計1673人であった。

意思決定スキルの因子として、意思決定の熟慮型であるステップ(11項目、 $\alpha=.852$)、周りへの配慮や相談等の影響である周囲の影響(5項目、 $\alpha=.747$)、直感(5項目、 $\alpha=.641$)が得られ、寄与率は45.7%であった。

尺度の合計得点の方向性は次の通りである(表1)。

表1 各尺度の方向性

<p>【意思決定】 合計、ステップ：高得点ほど、より熟慮の傾向 周囲の影響：高得点ほど、より主体的 直感：高得点ほど、より直感的</p>
<p>【自己制御】 自己表出：高得点ほど、より表出的 抑制：高得点ほど、より抑制的 積極性：高得点ほど、より積極的(対人協力的)</p>
<p>【刺激欲求】 スリル志向：高得点ほど、より慎重(欲求が弱い) 社会的抑制：高得点ほど、より抑制的 経験志向：高得点ほど、より慎重(経験抑制的)</p>

意思決定スキルの合計及び下位尺度と、SR(上側3行)、SS(下側3行)の相関を示した(表2)。意思決定の合計、ステップ、直感

は、概ね、SRとは正のやや弱い相関を、SSとは負の弱い相関を示した。したがって、意思決定スキル尺度の信頼性及び妥当性は、概ね確認されたと判断できた。

表2 意思決定スキルとSR、SSとの相関：

中学生

	合計	ステップ	周囲の影響	直感
SR自己表出	.485 **	.261 **	.274 **	.405 **
抑制	.308 **	.319 **	.036	.083 **
積極性	.429 **	.354 **	.090 **	.267 **
SSスリル志向	-.145 **	-.054 *	.036	-.292 **
社会的抑制	-.226 **	-.233 **	.159 **	-.237 **
経験志向	-.258 **	-.236 **	.049	-.219 **

** $p < .01$, * $p < .05$

学年差については、周囲の影響は学年間に有意差が認められ、3年より1年が高かった($p < .05$)。性差では、直感について男子の方が高かった($p < .05$)。また直感には、学年差も認められ、3年は、1年及び2年よりも高かった($p < .05$)。

生活行動や危険行動と、合計やステップとの関連については、Spearmanの順序相関係数を計算し、 $r > .100$, $p < .01$ の場合のみ示した(表3)。その結果、合計、ステップとも、テレビ等や宿題の時間決定、喫煙や薬物乱用の将来予測、飲酒の誘いへの対処等と有意な関連が見られ($p < .05$)、同スキルが高いほどより健康的な傾向にあった。周囲の影響と直感については、生活行動や危険行動との間に有意な関連はほとんど認められなかった(表には含めていない)。

一方ネットに関する危険行動との関連については、行動の経験と、合計やステップとの間には、関連はほとんどなかった。一方、危険行動経験者の方が、周囲の影響を受け

すく、直感の傾向が強かった(p<.05)。

表3 意思決定スキルと生活行動、危険行動等との関連性：中学生

	合計		ステップ	
	男	女	男	女
就寝時刻決定	.102	.104		
体育以外の運動実施		.129		
テレビ等時間決定	.211	.184	.159	.151
宿題時間等決定	.172	.254	.135	.232
成人時の喫煙の予測	.123	.151	.108	.154
未成年飲酒予測			.111	
飲酒誘いへの対処	.175	.180	.178	.146
生涯の薬物乱用予測	.142	.122	.134	

2) 高校生

回答者数は、1年：男子123人、女子142人、2年：男子126人、女子128人、合計519人であった。

因子は、意思決定の熟慮型であるステップ(10項目, $\alpha=.841$)、周囲の影響(5項目, $\alpha=.734$)の2因子が抽出され、寄与率は36.7%であった。

意思決定スキルの合計、ステップ、周囲の影響について、SR(上側2行)、SS(中間3行)、SE(自尊感情、最下行)との相関を示した(表4)。意思決定の合計、ステップ、周囲の影響は、概ねSRの下位尺度とは弱い正の相関を、SSとは無相関または弱い負の相関を、SEとは弱い正の相関を示した。したがって、意思決定スキル尺度の信頼性及び妥当性は、十分とは言えないが確認されたと判断できる。

意思決定と、生活行動や危険行動との関連については、合計やステップでは、就寝時刻・スクリーンタイム時間・宿題の進め方等の決定と弱いながらも有意に関連し、合計及びステップの得点が高いほど、生活行動の決定がより主体的であった。また、シートベル

ト着用、飲酒の誘いの拒否、薬物乱用の将来予測についても有意に関連し、より危険回避的であった。周囲の影響については、影響を受けにくいほど、スクリーンタイム時間が短く、飲酒の誘いを拒否する傾向にあった。したがって、熟慮型の意思決定、及び主体的な意思決定は、危険行動の防止や健康的な生活習慣と関連すると考えられた。

表4 意思決定スキルとSR, SS, SEとの相関：高校生

	合計	ステップ	周囲の影響
SR自己表出	.365 **	.170 **	.420 **
積極性	.278 **	.263 **	.113 *
SSスリル志向	-.052	-.048	.018
社会的抑制	-.042	-.185 **	.213 **
経験	-.170 **	-.177 **	-.052
SE自尊感情	.242 **	.119 **	.273 **

** p<.01, * p<.05

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

勝野 眞吾, 北垣 邦彦, 鬼頭 英明,
西岡 伸紀, 佐藤 恵子, 並木 茂夫,
真栄里 仁, 我が国のアルコール関連問題とこれからの学校における飲酒防止教育, 日本アルコール関連問題学会雑誌, 査読無, 17(1), 2016, pp.95-98

[学会発表](計4件)

西岡 伸紀, 鬼頭 英明, 小池 理平, 高校生の意思決定スキル - 構成因子及び生活行動等との関連性 -, 近畿学校保健学会, 2017.7.1(発表承諾済み), 和歌山県立医科大学(和歌山県)

西岡 伸紀, 中学生の意思決定スキル - 構

成因子,及び生活行動,心理的特性等との
関連性 - ,日本健康教育学会 ,2017.6.25 ,
早稲田大学 (東京都)

西岡 伸紀,中学生の意思決定能力と危
険行動との関連性 - 尺度開発及び予備的
調査の企画 - ,日本セーフティプロモ
ーション学会 ,2016.12.9 ,京都学園大学(京
都府)

西岡 伸紀,鬼頭 英明,青少年の危険
行動と意思決定能力の関連性に関する文
献研究 ,日本学校保健学会 ,2016.11.20 ,
筑波大学 (茨城県)

[図書](計1件)

西岡 伸紀,他,南山堂,学校保健マニ
ュアル改訂9版,2017,229(85-97)

西岡 伸紀,他,ぎょうせい,学校保健
ハンドブック第6次改訂,2014,
315(102-106,239-245)

6. 研究組織

(1)研究代表者

西岡 伸紀 (NISHIOKA, Nobuki)
兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・教
授
研究者番号:90198432

(2)研究分担者

小川 和久 (OGAWA, Kazuhisa)
東北工業大学・教育課程センター・教授
研究者番号:00224098

鬼頭 英明 (KITOH, Hideaki)
兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・教
授(移行)
研究者番号:90161512

竹西 亜古 (TAKENISHI, Ako)
兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・教
授

研究者番号:20289010

有園 博子 (ARIZONO, Hiroko)
兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・教
授
研究者番号:70282366

森 良一 (MORI, Ryoichi)
国立教育政策研究所・その他部局・教育課
程調査官
研究者番号:50515210

島田 貴仁 (SHIMADA, Takahito)
科学警察研究所・犯罪行動科学部・室長
研究者番号:20356215